

論文

震災復興主体となる女性自助組織の社会的背景とは何か？ 表面化するカースト構造をめぐって

竹内 愛[†]

要旨

2015年ネパール大地震が発生し、旧王都パタンでも甚大な被害が出た。現在、コミュニティ復興に貢献しているのは、ネワール民族のジャプ（農民カースト）女性たちである。ジャプ女性は、中長期的な復興過程では男性以上に重要な役割を果たしている。その背景には、女性自助組織の「組織」とこれまでの活動の経験がある。

しかし、低位カーストのポデ（掃除カースト）女性は地震発生後、今まで通りの生活ができなくなり「災害弱者」となった。ポデ女性は、震災以前から自助組織を結成していなかったため、災害時にも連帯して活動することができなかった。ポデ女性が組織化できないのは、ポデ集落は、どこのコミュニティにおいてもマイノリティであるからである。女性は組織化することで社会的役割を得て災害時にも活躍できるが、ポデの場合は難しい。震災によって社会の根底にあるカースト間の壁が表面化し、カーストを超える共同は困難であることが浮き彫りとなった。

キーワード

ネパール大地震、震災復興、女性自助組織、災害弱者、低カースト

[†]多文化共生研究所客員共同研究員、日本学術振興会特別研究員 PD

はじめに

筆者は、2003年からネパールのカトマンズ盆地の旧王都パタンに居住するネワール族の女性自助組織「ミサ・プツァ」の活動について文化人類学的調査を断続的に行ってきた。パタンは、カトマンズ盆地南部に位置し、カトマンズ市の南約5キロメートルにある、ネワール民族が築いたマッラ王朝（1200－1689年）の旧王都である。人口の約8割がネワール民族で、彼らは独自のカースト制度をもっており、約50のタル（名字であり、カースト職業集団）から成る。都市は、旧王宮を中心に、同心円状にタル（以後「カースト集団」とする）別に住み分けられている。1990年代に、NGOの主導によってパタンに初めて女性自助組織が設立された。そして、2000年以降は、トール¹ごとに地域の女性たちによって自発的に設立され、急激に活動が盛んとなった。女性自助組織は、これまで家庭内に留まっていた女性たちの活動範囲を広げ、地域の絆を強める機能を果たしてきた。筆者は、農民が居住するパタンのNトール及びPrトールで調査を行ってきた。調査の結果、女性自助組織の効果は、開発本来の目的よりも、副次的なもののほうが重要であることが明らかとなっ

た。すなわち、自助組織の活動が、それまで家庭内に閉じ込められてきた女性たちが外に出て活動する契機となり、それが地域の繋がりを強めてきたことなどである（竹内2007、2013、2019）。農民（ジャプと呼ばれるカースト集団）はネワール民族の中でも人口が最も多く、女性自助組織の活動も盛んである。

2015年4月25日、ネパール中西部で巨大地震が発生した。カトマンズ盆地では、ダルバール（王宮）広場、スワヤンブナート、ボーダナートなど世界文化遺産に登録されている建造物や寺院の多くにも被害が出た。旧王都であるパタンもそのひとつである。パタンは市街全体が世界遺産であるが、そこに居住するネワールの住民たちが被災し、現在も復興の過程にある。

筆者は、ネパール大地震発生以後は、震災復興過程における女性自助組織の積極的な活動に焦点をあてて研究を進めている。これまでの研究では、ジャプの女性たちが、震災後の困難な時期を乗り越え、復興に大きな貢献を行ってきたことがわかってきた（竹内2018）。少なくともジャプの女性たちは、災害弱者とは言えず、中長期的な復興過程ではむしろ

1 トールとは、ネパール語で、ワード（区）の下位行政単位（ネワール語ではトゥーと呼ばれる）。

男性以上に重要な役割を果たしているのである。その背景には、女性自助組織の「組織」とこれまでの活動の経験がある。

しかしながら、他のツール（及び農民以外のカースト集団）で調査を進める中で、震災が発生したことで、今まで通りの生活ができなくなった災害弱者女性の存在が明らかとなった。それはとくに低位のカースト集団の女性に顕著にみられた。震災被害、復興過程での相互扶助関係などをみていくと、カースト集団を越えた相互扶助は震災直後にはみられたものの、その後、時間を経るにつれて、カースト集団ごとにまとまって復旧・復興をしようとする傾向がみられるようになった。そのため、復興過程において、ネワール民族の社会の構造・特性と女性自助組織の活動の経験の差が顕在化したと考えられる。そこで、本稿では、次の2つの課題を明らかにしたい。第一に、自助組織の活動経験の差と女性たちの立場の違い（災害弱者か復興主体か）の関連性を明らかにし、第二に、復興過程で表面化してきた、ネワール社会におけるカースト構造とカースト間の復興格差というジェンダー問題とカースト問題が絡み合っている二重構造に焦点を当てたい。

論文構成は次の通りである。第1章では、調査地パタンに居住するネワール族の概要と彼らの独自のカースト制度、及び、女性自助組織について論じる。第2章では、ネパール大地震と調査地パタンでの地震被害と公助の状況について概観する。第3章では、ジャブの創造的復興の2つの事例を紹介する。第4章では、震災当時、各カースト集団がどのような避難生活を送り、相互扶助を行っていたのか聞き取り調査から明らかにする。そして、終章では、先に挙げた2つの課題に関する考察を行う。

第1章 ネワール社会の概要

(1) 旧王都パタン（ラリトプル市）（写真1）

筆者の調査地であるパタンは、15世紀に、ネワール民族が築いたマッラ王朝がカトマンズ、バクタプル、パタンの3王国に分裂した後のマッラ王朝後期（1476－1768年）に繁栄した。首都であるカトマンズ市から南に5キロメートルに位置し、現在のラリトプル市の旧市街²を指す。リングロードと呼ばれる環状道路の内部で、バグマティ川南岸の台地にある。

カトマンズ盆地にある他の2つのマッラ王朝の旧王都であるカトマンズとバクタプルに比べて、パタ

ンには仏教寺院の数が圧倒的に多く、仏教都市の名残を残している。旧王都であった旧市街は、現在もネワール民族の人々でほとんど占められている。ネワール社会には、物事を「浄・不浄観」によって序列化する価値観が存在する。そして、それは日々の行動規範においても、社会的階級（カースト）の意味づけにおいても機能している。ネワール民族には、ヒンドゥ教徒、仏教徒の両方が存在するが、両宗教は混交している。仏教には本来カースト制度はないが、ここでは仏教徒も、そのようなカースト制度の内部に組み込まれている。

王都は宮殿・寺院群を中心とし、煉瓦と木材でできた4、5階建ての集合住居が立ち並ぶ街路がそれを取り囲み、街の中心から外延部にかけて高位カーストから低位カーストの人々へとほぼ同心円状に住み分けている³。

このように、町は宗教的な世界観を基本構造としているとともに、カースト構造や浄・不浄観念に従って形成されている。町は、曼荼羅的な世界観や浄・不浄観念に従って形成されており、ネワール民族の信仰、儀礼、祭祀などの伝統文化と結びついている。



写真1 震災前のパタン旧王宮前広場

(2) ネワール民族とカースト制度

前述したように、ネワール民族は、あらゆる事象を浄・不浄観によって捉える価値観を持っている。浄・不浄観とは、ヒンドゥ教が教える世界創造神話に由来し、人々の職業や儀礼上の役割を定めたカースト制度も、そのような浄・不浄観に基づいた世襲的な階級である。例えば、最も「浄」の存在は、神であり、神に近い存在である僧侶カースト集団（ヒ

2 パタンとは、現在のラリトプル市を構成する29区の一部であり、1区、2区、3区、4区の一部、5区、6区、7区の一部、8区の一部、9区の一部、10区、11区、12区、13区、15区の一部、16区、17区の一部、19区、20区である。城壁に囲まれていた旧市街にあたる、リングロード（環状道路）の内側がパタンと呼ばれる。

3 Gellner1996: 48.

ンドウ教司祭デョバルム、仏教司祭グバジュ）が高位カーストと位置づけられ、「不浄」とされる肉を扱う肉屋カースト集団（カサイ）や掃除カースト集団（ポデ）などは低位カーストとされる。一方、カーストによるランク付けはあっても、カースト集団ごとに独自の神格、独自の慣習を持ち、それぞれ自分の属するカースト集団に対してカースト・アイデンティティをもっている（Gellner1996：63-68）。

カーストにおける序列と浄・不浄の程度は、個人の生まれによって決められるもので、基本的には固定したものだと考えられている。パタンの街だけで、そのカースト集団を表すタル（名字：カースト集団）は50を超えて存在する（マハラジャン2002：35）。各カースト集団の世帯数は、ジャブ（農民カースト集団）が最も多く、バレ（金銀仏具細工カースト）、グバジュ（仏教僧侶カースト）、続いてセショー（官吏カースト）となっている。他のカースト集団の世帯数はあまり多くない⁴。

異なるカースト間では、特定の儀礼の場を除いて、互いに距離を保ってきた。例えば、高位カーストの人が低位カーストの人を家屋に入れる習慣はない。また、「カースト内婚」⁵に対する規範、下位のカーストから水や食物（特に、米）を受け取れない（山上2001）、下位のカーストと一緒に食事ができないなどの異カースト間の「食物授受の禁忌」⁶等がある。特に米飯は「日常的に口にする食物の中でも不浄性を伝達しやすいとされており、家族の成員以外とは食事の場さえも共有してはならないとされている」（山上2008：60）。現在では、近代教育を受けた若者を中心として伝統的な価値観は薄れつつあり、カースト的規範は変化しているが、年配者には規範通りに生活する人が多い⁷。

(3) ネワール民族の女性自助組織「ミサ・プツァ」

「ミサ・プツァ」とは、ネワール語で「女性グループ」を指す。1991年、地元NGOがネワール民族の農民女性をターゲットにして、パタンで養成したのがはじまりである。パタン地域開発局CDS（Community

Development Section）も、1996年から99年の間に7つのミサ・プツァを養成した。2000年以降、養成プロジェクトは終了しているが、グループに対して運営トレーニングを数多く行っている。ミサ・プツァについて知った女性たちが、各地で自発的に設立し始め、それぞれのコミュニティ、カースト集団のニーズに合わせて、女性の社会的、経済的なエンパワーメントを目指して活動を行ってきた（写真2）。CDS



写真2 ジャブ・ミサ・プツァの料理ケータリング風景



写真3 ラリトプル市地域開発局(CDS)で開催されるミサ・プツァの四半期活動報告会

- 4 1940年のラリトプル市の世帯調査では、ジャブ・クマー32.3%、バレ、グバジュ21.3%、デョバルム、セショー18.4%、タモ等3.5%、クサー、テペ3.7%、ブン、チパ、パー、サエ、ガトウ、ナウ、カウ、クル、ドビを合わせると4.5%、ナエ3.5%、ジュギ3.5%、ポー、チャムカラー1.3%であった（マハラジャン2002：41）。
- 5 カーストの浄性を維持するため、異カースト集団との婚姻は禁じられている。低位カーストの者が高位カーストの家に嫁ぐと、女性の皿は不浄であるため誰も洗うことができず、また、結婚式などの儀式時には必ず訪れなければならない家の神の所へ礼拝しに行くこともできないという。
- 6 ネワール社会でも、食事、食べ物、対人接近、婚姻などに関する社会慣行には、けがれの観念が浸透し、カーストの存在と不可分なものとなっている。カースト間の上下序列、分離・反撥の面がはっきりみとれるのはやはりこれらの慣行においてである（石井1975：84-85）。
- 7 ただし、結婚に関しては、カースト内婚が多く、現在でも意識して同カースト内で恋愛結婚をしたり、お見合いによるカースト内婚をしたりするケースが大半になっている。

には設立の登録をせずに、独自の目的を持って活動を行っているグループもある⁸。

CDSにミサ・プツァを登録するためにはいくつかの要件がある。例えば、30人以上会員がいる、CDSで設立・運営のための1週間のトレーニングを受ける、毎年CDSへ赴き、ミーティングに参加して報告書を提出する(写真3)、リーダーは3年ごとに変わる等である。

ミサ・プツァをCDSに登録すると、女性たちにとって利点が多い。例えば、計算トレーニング、読み書きトレーニング、ミシンによる裁縫や美容師養成などの職業トレーニング、人前で話すなどの能力向上トレーニング、保健所から衛生指導や栄養指導が受けられる等である。

本来、ミサ・プツァは、カーストごとに設立されるものではない。しかし、女性たちはトール(小コミュニティ)ごとにミサ・プツァを設立しているため、伝統的にカースト集団別に住み分けをしているパタンでは、ミサ・プツァの会員も必然的にカースト集団ごとになっている⁹。

2018年11月時点で、パタン内部に300のミサ・プツァが存在している¹⁰。設立20年以上の長い歴史を持つグループもある。2000年代頃までは、家族に家の外に出ることを反対されて、グループに参加できない女性も多かったが、2010年代になると、どのトール¹¹にもミサ・プツァが設立され、ミサ・プツァの会員にならないければ、地域住民ではないという程にネワール社会に定着し、家族もミサ・プツァに一人は参加させるようになってきた。

ミーティングに行くとき女性たちが行政から様々な情報を入手できることや、衛生やゴミの分別やリサイクル方法を学んで、それを家庭で実践するなどの実利的な面があること、マイクロ・ファイナンスによって家計を助けることができるということ、地域で奉仕活動をしており、地域のためになっていること、等も地域の人々に理解され始め、夫や家族も、ミサ・プツァへの参加を好意的に受け入れている。また、選挙の時期になると、政党とは何か、市民が投票をする意味、選挙方法などを行政職員から教えてもらうことができる。選挙の立候補者が、コミュ

ニティで集会を開き、そこにミサ・プツァを招待するというこもしばしばある。

第2章 ネパール大地震の被害

(1) ネパール大地震

2015年4月25日11時56分、ネパールの中西部でマグニチュード7.8の大地震が発生し、ネパール及び中国、ブータン、インド北部、バングラデシュなど広範囲で揺れが観測され、大きな被害が出た。地震によって、建物の倒壊、雪崩、土砂崩れなどが発生し、8,891人が死亡し、605,254軒の家屋が倒壊し、288,255軒の家屋が被害を受けた。約188,900人が一時的に避難した¹²。

カトマンズ盆地では、ダルバール(王宮)広場、スワヤンブナート、ボーダナート、ダラハラ塔など世界文化遺産に登録されている建造物や寺院の多くにも被害が出た(写真4)。同年4月28日の国連発表では、ネパールの人口の約30%にあたる約800万人が被災したとされた。大地震以後も、数か月に亘って余震が続き、パタンでは、人々は、家が倒壊していない場合でも、避難場所から完全に自宅に戻ったのは、地震から約2か月後であった。



写真4 震災修復中のパタン旧王宮前広場

8 それらについては、実際にいくつあるか行政側も把握し切れていない。

9 近年、町には空き家を異カーストや異民族に貸しているケースもあり、そのようなコミュニティでは、異カースト混在のグループもあるが、基本的には、大多数のカースト集団と少数の異カーストという図式になっている。

10 2018年11月Community Development Section (CDS)からの聞き取りによる。

11 パタン内部には、100以上のトールがある。トールの規模は大小あるが、トール・ガネーシュ(ガネーシュを祀る寺院またはガネーシュの祠)によって地縁的に束ねられている。人々は人生儀礼や日常礼拝を行う場合には、まずトール・ガネーシュに礼拝をする。

12 Nepal Earthquake Humanitarian Response: April to September 2015 (reported by the United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs) <https://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/nepal_earthquake_humanitarian_response_report_lr.pdf>, 2019.11.7参照。

(2) ラリトプル市での被害と市役所の公助（公的支援）の現状

ラリトプル市役所の復興担当者によると、被害状況は、死者49名、負傷者128名、倒壊家屋2,300軒、一部損壊家屋5,000軒、被災者75,000人である。市役所の役割は、ネパール政府が決めた基準で、家の壊れた人、怪我人の申請者に対して、支援金を給付することが中心である。被災した建物の震災被害を3段階（赤：立ち入り禁止、緑：安全、黄色：修復したら居住可）で評価し、被災した申請者に対して、罹災証明IDカードを作成している。ネパール政府から、家の建て直しのために、30万ルピー（約30万円）¹³の国からの支援金を給付するように指示を受けている。

家屋再建支援は、建築基準を満たしていれば支援金を受け取れる。1回目は、地盤チェックを合格すると5万ルピー、2回目はDPC耐震基準を満たすと15万ルピー、3回目は、1階部分が基準を満たして完成すると10万ルピーの支援金を受け取れる。今までのところ、1回目の支援金は6,300人の被災者が受け取っている。2回目の支援金はそのうちの25%の人が受け取っており、3回目の支援金は、1回目の受取人の20%を受け取るに留まっている。理由としては、まだ建築途中であることが大半だが、建築基準が厳しく、それに合わないものを建築しているケースもある。2015年から2019年8月の筆者の調査時点までの間で、市役所から支援金を受け取った人は、合計7,373人であるという。

市役所傘下の地域開発局では、地震発生後、人々のシェルターとして、支援物資として届いたテントを配布したり、妊娠中の女性や赤ちゃんを持つ母親に、赤ちゃんの服、おむつの布などを買って、無料提供したりした。震災1週間後からは、UNICEF提供の大きなテントを市役所の庭園内と8区の畑に建て、地震発生後の約1か月、子どもたちを集め、絵を描かせたり、ダンスをしたり、勉強を教えたりした。その際に、子どもたちにノート、ペン、消しゴムを配布し、軽食も提供した。

(3) ワード（区）の役所による公助¹⁴

地震発生後、各区役所には、市役所、国際機関、NGO等から住民のための救援物資が届けられた。8区ではパタンの中でも最も被害が大きかったため¹⁵、他の区よりも多く支援物資が届いたと聞いたが、市役所から区役所には、10万ルピー（約10万円）の寄付金と薬、食材、生活必需品、CDO（中央地区行政事務所）からは食材、赤十字からはテント、公衆衛生分野で活動しているNGOであるENPHOとYUMからはアセトアミノフェンの提供があった。

多くの区役所では地震から数日経ってから、区役所の職員たちでレスキューチームをつくり、区役所が機能し始めたという¹⁶。区役所の役割は、各機関から届いた救援物資の配布等を行うのが中心であった。

また、区ではないが、公的支援に準ずるものとして、ジャブ・サマージ¹⁷からジャブの会員の怪我人に1人につき1万ルピー（約1万円）ずつ見舞金が出された。



写真5 農民扶助組織ジャブ・サマージ会館

第3章 農民カースト「ジャブ」の創造的復興

(1) 被災後の伝統文化を生かした「新たな街づくり・観光地化」：Pr トールのゲストルーム付き家屋プロジェクト

13 1NPR=0.95JPY（2019年9月25日時点）の換算率によれば、ルピーと円はほぼ同額である。

14 8区の区役所職員と4区の区役所職員からの聞き取りに基づく（2019年8月）。

15 8区は12トールから構成されており、家屋約2,200軒、人口約12,000人ほどである。8区の被害は、倒壊家屋は400軒を超え、ラリトプル市の中では震災被害が大きかった地域である。最初の地震、その後の数回の余震で、怪我人が50-60人ほど出た。8区では、死者は出なかったが、8区の住民1人が別区の道を歩いていて、大学の壁が目の前で崩れたのを見て心臓発作で亡くなった。

16 4区区役所では、国際NGOから各区役所に、義援金、救助物資（グローブ、ヘルメット、ブーツ、ピック、マスク）とテントが届いたので、最初の仕事はそれらを住民に配布することだった。震災7日後からは、広場を公営避難所として提供し、テントを建て、そこで住民に食べ物を提供した。偶然にも震災前日、震災トレーニングを国際NGOから受けていたため、他の区役所よりは災害の想定ができていたためスムーズに動けたという。

17 ジャブ・サマージとは、40の農民居住トールの住民を会員とする巨大な農民カースト集団自助組織である（写真5）。

地震発生後1年が経過して、「新たな街づくり・観光地化」復興プロジェクトが立ち上がった。プロジェクトの発起人は、Pr トール出身で、ダイヤモンド会社社長、NGO 会長でもある有力者である。「Pr トールはパタンでも壊滅状態の家が多かった地域で、家をつくるお金もない人達も大勢いる。家がなくなってシェルターで住み続けなくてはいけない人と新しく家をつくる人の間に格差ができないようにするにはどうしたらいいか。」と、当初、被災した住民が話し合い、プロジェクト内容に賛同して、プロジェクトはスタートした。

プロジェクトの目的は、コミュニティにツーリストを呼んで、震災後、住民の経済格差が起きないようにコミュニティを活性化させることである。地域の伝統を守りつつ、仕事の平等なチャンスとなり、地域の人々全員の収入につなげることができる。

具体的には、住民の倒壊した家々を、ゲストルーム付きの家に建て直し、コミュニティ内部に伝統芸能などを披露する場所を設立して、国内外から観光客を呼ぶ計画をしている。ネワールの歌やダンスなどの芸能や料理は、コミュニティ内部に既存のミサ・プツアの会員が披露する予定だという。建設については、3年で完成予定（2018年11月時点で、22軒が完成）としているが、人手不足のため、工期は長引いている。

民宿は、具体的には、1階をカフェやハンディークラフトのおみやげ店、または、ゲストルームにし、2階は、ゲストルーム、3、4階を住民の居住スペースとする家屋のことである。ツーリストは、プロジェクトですべて集中管理し、そこからサービスの提供をする計画にしている。

(2) ミサ・プツアの関与と現状

Pr トールの女性自助組織の会員は、110人で、毎月220ルピーの集金（200ルピーは預金、20ル

ピーはコミュニティのための寄付金）をしている。震災当時は、瓦礫を片付けて道を人が通れるように掃除を行った。現在は、建設作業に積極的に関わっている。毎日、朝7時から夕方6時の工事を手伝っている（写真6）。家屋が全て完成したら、コミュニティ内で観光客のためのショーを行う予定である。

プロジェクトの現状（2018年11月調査時点）としては、民宿を開始した家は1軒（2018年10月スタート）ある。2018年10月にドイツ人グループ6人が宿泊した。1部屋1泊35ドル（トイレ・シャワー付き、タオル・シャンプー・石鹸付き、朝食付き）である。室内にトイレ・シャワーなしの部屋だと、1泊25ドルだという。この民宿へはInternet websiteから予約できる。ミサ・プツアの活動としては、プロジェクトのために、ミサ・プツアの会員は、3か月間の伝統的なダンスのトレーニングを受けた。このトレーニングは、これからゲストルームに泊まる客に向けてやレストランで披露することになっている。

(3) N トールの復興プロジェクト

Pr トールに似たケースとして、N トールでも女性自助組織ミサ・プツアがトールのために積極的に活動しており（写真7）、住民が経済的な復興をするために、次の2つのプランに精力的に取り組み始めている。

1つ目は、「観光客の誘致」である。具体的には、月1回、有償で住民によるネワール舞踊、楽器演奏、ネワール式宴会をセットにしたショーを開催することを計画している。そのために、ミサ・プツアの会員たちは宴会料理の訓練をしている。コミュニティの8歳から16歳までの子ども（男女ともに）に、伝統的舞踊と笛や太鼓を教え、舞踊や楽器をできるようにになったら、子どもたちをショーに出演させるつもりだという。また、観光客向けのホームステイ



写真6 Pr トールの復興プロジェクト作業中のグティのメンバーとミサ・プツアのメンバー



写真7 N トールのミサ・プツアのメンバー（地域防災センターのセレモニーの運営）

も計画しており、コミュニティ内の数軒の空き家を会員で清掃し、改装も行った。観光客には、会員がネワール料理を振る舞う計画なので、会員に料理、清掃方法トレーニングも行っている。

2つ目は、空き家を利用した「ブティック店経営」である。まだ開店には至っていないが、今後、ミサ・プツァの女性が当番制で店番を行い、サリーの仕立をするという。ブティック経営によって女性に雇用を生み出したいと考えている。

第4章 カースト別のパタンの住民の震災体験

震災当時と避難生活について、カースト集団によって差異があったのかを明らかにするために、カースト集団別で聞き取り調査を行った。ここでは、高位カーストに位置付けられる「バレ」と中位カーストに位置付けられる「ジャプ」と低位カーストに位置付けられる「ポデ」の人々からの聞き取り内容を紹介し、そこからカースト別の特徴を分析する。「ジャプ」については、第3章で説明したので、ここでは、筆者が聞き取りをした「バレ」と「ポデ」カーストについて簡単に説明をする。

「バレ」とは、ネワール民族の仏教寺院の僧、または、伝統的な金銀仏像細工をする職人のカーストであり、高位カーストに位置付けられている。バレの名字は、「サキヤ（ダクワ、ブダチャリヤ、ビシュも含む）」である。現在でも、寺院の側に居住地が

あり、メタルの仏像作りを職業にしている人々が多い。

「ポデ」とは、ダリット（壊された民）、アチュート、アンタッチャブルなどと呼ばれるネワール民族の被差別カーストの一つであり、名字は「ポデ」または、「デウラ」である。ネワール民族の最下位職業カースト集団¹⁸に位置付けられている。ネワール社会には、日常的に、ダリットには触れてはならない、家に入れてはならない、一緒に食事をしてはならない、井戸、共同水場を共に使用してはならないなどの差別的ともいえる規範がある。伝統的に、パタンの町の周縁部に居住している。近年、ポデの人々の中には、ゴミ収集車で街のゴミを回収したり、箒で市役所や街の掃除をしたりする公務員となっている人々もいる（写真8）。

(1) 高位カースト「サキヤ」の人々の被災生活について ＜M・Sさん（バレ・カースト、50代男性）からの聞き取り＞

私は6区と12区にまたがるTトールに住んでいます。Tトールは全体で90軒の家があり、500人のバレ・カースト（名字はサキヤ）が住んでいます。死傷者はいませんでした。行政によって15軒が立ち入り禁止（レッド）の評価を受けました。そのうち3軒は政府の支援金を得て建て直しましたが、それ以外は、そのままになっている家もありますし、まだ建設途中の家もあります。

Tトールの人々は全員トール内にある公立学校に避難しました。学校の教室や廊下、そこに入り切らない人々には校庭で寝ている人もいました。私たち家族は12日間だけ避難しましたが、その後は家に戻りました。多くの人たちが同じところに帰宅しました。

トールには、トール・スダル・サミティ¹⁹（町内会）、ミサ・プツァ（女性自助組織）²⁰、ユース・クラブ（若者グループ）がありますが、まず、町内会が中心となって、町の住民のために看護師（コミュニティ住人）を従事させた簡易クリニックを設置し、薬を揃え、住民の健康チェックもしました。医者は残念ながら不在でしたが、クリニックに薬があることでとても安心でした。



写真8 市役所でスウィーパーとして働くポデ女性たちと市役所職員（左から3番目、筆者（右から3番目）

18 水を受け取れない、不可触民（Pani Na Chalne Chhoichhito Haalnu Parne）とされる。

19 「トール・スダル・サミティ」とは、1990年代以降、パタン各地で設立されたコミュニティ発展のために運営しているグループである。1990年代以降、各地のトールで設立された比較的新しいコミュニティ内の組織であり、男性も女性も会員になることができる。グティがコミュニティで権力を持ち、コミュニティ運営をしている場合は、トール・スダル・サミティが設立されていないケースもある。本稿では、町内会と訳す。

20 ミサ・プツァの詳細については、第1章（3）参照。

女性自助組織とボランティアたちは、避難生活の人たちのために毎日炊き出しをしました。食材は、市役所から米や野菜の無料提供も受けましたし、足りなくなったら、各家からダルや米等を互いに出し合ったり、購入したりしていました。避難建物内の掃除も継続的に行いました。

ユース・クラブは、毎晩、泥棒などが出ないようにトールにあるすべての家の見回りを行い治安維持のため警備役を担いました。

避難生活でとにかく一番の問題は、全員が学校に避難したので、人口密度が高くてたいへんでした。また、パタン・チェンバーというパタンの労働組合の支援で、配水車が学校に2回やってきて無料で飲み水の提供を受けましたが、足りませんでした。多くの人たちが、いったん帰宅しても、また地震が来るのではないかと避難所に戻ることもあり、行ったり来たりしていました。

トール内部はそこまで被害がなかったもので、町内会とユース・クラブの人々がトラックに、衣類、食料、テントをたくさん載せて、震災被害が大きかったと言われるシンドウパルチョークに運びサポートを行いました。

(2) 中位カースト「ジャブ」の人々の被災生活 ＜G・Mさん（ジャブ・カースト、30代女性）からの聞き取り＞

私は地震の1か月前から8区の区役所でソーシャルモビライザーとして働き始めたばかりでした。私はIトールに住んでいます。地震が起こった時は土曜だったので、家にいましたが、結婚して新しい家を建てたばかりだったので、家に被害はありませんでした。地震後1週間だけ、近くの畑で避難生活を行いました。外部からのサポートは何もありませんでしたが、町内に住む有志の人々からの寄付を受けて、「グティ」²¹と町内会は、地震が起きてすぐ住民の安否確認を行い、食事を作って食べさせたりしていました。食材は、近所の人々がそれぞれ食べ物を各家から出し合ったり、なければ、店で購入して、炊き出しをしたりしていました。4月25日の地震の次の日にも、大きな余震が来ましたが、グティの炊き出しの人たちに渡そうと、両手いっぱいじゃがいもを買った袋を抱えていた男性が、地震が来て揺れた時に、そのじゃがいもがすべて転がって行ってしまったと話

していました。

8区のPiトールの人から聞いた話ですが、Piトールは、約700世帯、人口3,000人ほどの大きな農民カーストのコミュニティですが、そこでは、地震発生後1週間、グティと町内会がコミュニティのために大きな役割を果たし、住民のための炊き出しなどを行っていたそうです。Piトールでは、オーストラリア留学中の息子や娘たちから、トールの住民のためにとって40万ルピー（約40万円）が送られてきたそうです。

＜A・Mさん（ジャブ・カースト、50代女性）からの聞き取り＞

私は、選挙で当選した4区の女性議員です。Bトールに住んでいます。Bトールでは、ジャブ（名字はマハルジャン）の人口は240人で、カトマンズ盆地の外からやってきた人々が7,000人ほど住んでいます。Bトールのジャブは、元々は全員農業をしていましたが、みんな自分の家を建てる土地だけ残して売ってしまったので、現在は農業で生計を立てている人はいません。現在は、ほとんどが大工で、会社勤めの人も少数います。オーストラリアに留学している学生が4人ほどいます。

地震被害は、ジャブの家は6軒倒壊しました。他民族の家屋は7軒が倒壊し、合計で13軒が居住不可となりました。死者はいませんでした。

地震でグティの家が倒壊してしまったため、グティの家に避難することはできませんでした。それで、各家族は、自分の家の庭にテントを張ってそれぞれ生活し、相互扶助を行ったということはありませんでした。

私は、2か月間、家の横の空き地にテントを建てて、そこで生活しました。必要な時だけ家に入り、物を取るとまたテントで暮らしていました。震災当時は、区役所から飲み水の供給がありました。赤十字とCDSからテント提供を受けました。ジャブ・サマージから米を提供してもらいました。

夫の友人の家が倒壊してしまったため、夫と友人2人は、空き地にテントをそのまま張り続け、3人で友人が家を建て直すまでの10か月間、生活していました。その10か月間は、食事は、私の家で取り、寝る時は外のテントで寝るという生活をしていました。

Bトールで、ジャブの人で家を建て直した

21 グティとは、伝統的な男性の儀礼執行組織である。

人がいますが、1回目の5万ルピー(約5万円)の支援金は受け取れましたが、建築基準を満たせなかったため2回目からは受け取れなかったと話していました。土地が小さいのに大きな家を建てたせいだということでした。

ジャブ・サマージからは、家が倒壊して住めなくなった5家族にそれぞれ25,000ルピーずつ見舞金が届いたと聞きました。

(3)「ポデ」カーストの人々の被災生活

<B・Dさん(ポデ・カースト、40代女性)からの聞き取り>

Nトールには、伝統的にジャブ・カーストが多く居住しており、現在、ジャブの家が150軒あり、400人ほど住んでいます。私たちポデの家は11軒、他の民族の人々が少数居住しています。ポデの家族は、各家には5人ほど住んでいますので、人口は60人程度です。Nトールには死者や怪我人は出ませんでした。私の実家が完全に倒壊してしまいました。また、ジャブの家屋でも、住めなくなった家があったようです。

Nトールには大きな駐車場があり、ジャブの女性たちがそこを運営していました。地震発生直後、農民カーストの人たちは皆そこにテントをはって避難生活をしていました。しかし、私たちはカーストが違うので、その駐車場には避難することができず、市役所が開放している庭園で、2か月間、避難生活を送りました。

地震発生後、最初の2日間は、どこからもサポートもありませんでしたので、家にあったビニールを庭園に敷いてそこで寝泊まりしていました。家族のお腹がすくと、私が家に戻って料理をして、それを庭園まで持ってきて、家族みんなで食べました。

我が家以外は、家の台所が使える状態ではなかったので、ポデ10家族で一緒に炊き出しをしていました。炊き出しは男性も女性も一緒にやっていました。

私たちNトールに住んでいるポデ・カーストには、シ・グティ(男性による葬送儀礼執行組織)が1つあるだけで、他のコミュニティのような女性自助組織などはありません。避難生活中も、基本的には家族単位で生活していて、グティが機能することもありませんでした。

地震から2日後に、 कांग्रेस党の議員M・A氏が家の近くまで被災状況の視察に来たことがありました。その時に、「今、困っ

ていることはありますか?何か必要なものはないですか?」と聞かれたので、「テントがないから欲しい」とお願いし、テントをもらいました。もらったテントは大きなサイズのものだったので、そのテントを市役所の庭園に張って、11家族が一緒にそこで2か月間生活しました。

市役所の庭園に避難している人たちはとても多くて、どんな人たちが来ているのかよくわかりませんでした。アパートの部屋を借りて暮らしている人たちが多く、ネワール語がわからない人たちもたくさんいました。中には、酒を飲んで暴れて、けんかしている男性たちもいて大変でした。

市役所庭園の避難民に、食べ物の配給は何もありませんでしたので、10軒で一緒にご飯をつくり、食べていました。1度だけ、中国人グループが来て、料理を作って提供する時もありましたが、私はちょうど家に帰っていたときだったので、その話はあとから聞きました。

市役所に避難したので、市役所のトイレを使用できて、トイレの問題はありませんでした。飲み水は、NGOのサポートの配水車が常に来ていたので、水の苦労はありませんでした。2か月後からは、皆、家に戻り、日常生活に戻りました。

<S・Dさん(ポデ・カースト、女性)からの聞き取り>

私の住んでいる9区のRトールでは、コミュニティはテベカースト集団(小作人、名字は、ベンジャンカール)の居住地で、その中に、私たちポデの家族は3軒だけあります。町の入り口に門が建っていましたが、震災時に、その門が倒れて、その下敷きになって、3人が亡くなり、家屋の倒壊によって、4人が亡くなり、コミュニティ全体では、7人が亡くなりました。

私たちの住んでいるコミュニティは、ベンジャンカールの人たちがほとんどで、震災当時、お互いに助け合うことはなくて、地震の後、2か月間は、他人の畑にビニールシートを敷いて、家族8人で暮らしました。食事は、自分の家からキッチンガスを持ってきて、料理していました。どこからもサポートが一切来ませんでした。ポデは3軒しかないので、グティはありますが、女性自助組織はありません。避難生活はとても大変な日々でした。

< R・Dさん（ポデ・カースト、女性）からの聞き取り >

私の住んでいるKトールでは、多くはカサイ・カースト（肉屋カースト、名字は、カドギ、サヒ）が居住しており、全体で80軒建てていて、そのうちのほとんどの家屋の屋上部分が壊れました。死者は出ていません。地震の時に、階段から落ちて大けがを負った人が一人いました。地震発生後2か月近く、Kトールにある公園で生活していました。コミュニティには、女性自助組織があり、私も会員ですが、自助組織の名前は知りません。震災の時の相互扶助には何も機能しませんでした。自助組織では、全員毎月1,000ルピー預金します。加入目的は、預金による年利をもらうことです。預金以外の活動はありません。

(4) 聞き取りから明らかになったカーストごとの被災状況の特徴

まず、高位カースト（バレ・カースト）の状況を見てみると、そもそも家屋が丈夫で、被害が少なかった。トール内部での共助はとても強く、役割分担が明確になされており、組織が機能している。小さなコミュニティ内だが組織的に避難所の掃除、家の見回り、警備、炊き出し、簡易クリニックを設けるなどしたおかげで、混乱も発生せず、文化的な生活が継続可能であった。さらに、コミュニティの豊かな財源から、パタン外部の大きな地震被害地域に、物資支援とボランティア活動を行った。

一方、中位カースト（ジャブ・カースト）では、コミュニティによって、被害は大きなところも小さなところもある。ジャブ社会では、トール内部の共助だけでなく、40の農民居住トールの住民を会員とする巨大な農民カースト集団自助組織ジャブ・サマー、さらに、つながりのある外部組織からも支援を受けており、トールをはるかに越えた広い範囲のジャブ社会で共助を行っている。トール内では、トール内の組織（グティ、ミサ・プツァ、町内会）が役割分担を行い、炊き出しをしたり清掃を行ったり、様々な相互扶助を行った。また、ジャブ・サマーが避難生活中には、食材の提供を行ったり、怪我人には金銭的なバックアップを行ったりすることもあり、農民社会全体をサポートした。また、海外留学した子息たちが、コミュニティに送金するなど、国外からのバックアップもあり、さらに復興を速める結果となった。行政内部に、農民カースト出身者が数多くいることも農民の強固な相互扶助の一因となっていると考えられる。

最後に、低カースト（ポデ・カースト）の被災の特徴について挙げる。ポデは、どのコミュニティに

おいても人口的に少数派となっている。地震発生時も避難生活においても、他カーストとの協力や相互扶助は一切ない。Nトールのポデは、市役所という最も公助に近い場所に避難できたので、飲み水の提供などの公助を受けることができた。ただし、市役所には他とのつながりがない人々が多く避難していたこともあり、夜間酒を飲んで暴れる人が出ても、それを抑止して秩序を安定させるような人がおらず、混乱があったという。Nトールのポデは、少数でありながらポデの人々同士で連帯できていたが、それ以外の地域では、家族ごとに完全に分裂し、孤立してしまったポデ集落がある。

震災当時、孤立避難生活となった理由としては、圧倒的に、ポデの人口が少ないこと、そして、カーストの壁があり、近所に住んでいながら、相互扶助できなかったことが挙げられる。

終章 ネパール大地震における「災害弱者」

(1) 「災害弱者」とは

林は、「階級、カースト、エスニシティ、ジェンダー、年齢、障がいの有無や程度などによって、同じ被災地でもより大きな被害を受けたり、生活再建を含めた災害からの回復がより遅かったりする現実がある」（林 2016:18）と論じている。つまり、災害弱者とは、元々社会の周縁部に位置する人々であり、災害が発生した時に、深刻な被害に遭いやすく、災害が発生する前から存在した社会的な問題が顕在化し、災害によって、さらなる経済的な格差が現れるといえる。

調査地パタンでは、地震発生後1か月間は学校が休校となり子どもたちの相手をしなくてはならず、夫たちも会社の様子は毎日見に行くが、すぐに帰宅してくるため、女性達は、一日中そばにいる家族の世話のために、通常の生活に比べて労働量が増え、家事負担が大きくなり外で活動する余裕はなかったという話も聞いた。女性たちは災害直後に通常以上の過酷な労働を強いられたと言える。

また、カースト間でも状況は異なっていることが明らかとなった。低カーストの「ポデ」の人々は、避難生活の中で、他のカーストの人々とは同居、共同活動をすることができず、コミュニティの大多数の居住地から離れた場所で孤立した生活をせざるをえず、さらに、バラバラになっていたことで公的支援が届かなかった。唯一、市役所内に逃れたポデたちだけが、テント、飲み水の支援を受けられたが、市役所は、地元とのつながりが薄い異民族の人々が多く集まっており、暴れる人々がいるなど、治安は悪かったという。ポデの人々は、公助、共助ともに不足しており、自分たち自身で震災を乗り切らなくてはならなかった。

(2) 女性が復興主体となるためには？

前述したように、パタンでは、女性たちは、1990年代に外部から導入された女性自助組織の仕組みを学び、自分たちの社会に合わせて組織と運営を発達させてきた。女性自助組織ミサ・プツァは、以前は家族内に閉じこもっていた女性たちを横につなげると共に、(それまでは男性だけが関わっていた)地域社会に主体的につながる役割を果たしてきた。特に、農民カーストの女性たちが積極的に地域の清掃をしたり、儀礼祭祀で、男性の補助的な役割を担ったり、地域の住民のために簡易クリニックを実施したり、多様な活動を行って、社会的役割を得ていた。

そこを、大規模な地震災害が襲った。パタンにおける復旧支援については、仮設住宅などが無く、公的援助は不十分であったため、住民自身が復旧の活動の中心を担わざるを得ない状況であった。災害発生時からしばらくは女性たちには災害弱者としての側面がみられたものの、まもなく多くの女性自助組織は主体的な活動を始めた。前述したNツールとPrツールの農民カースト社会の事例は、創造的復興のひとつのあり方であるが、農民カーストの女性自助組織の活動が持続的な復興につながりつつある。震災後、復興プロジェクトが、女性自助組織の経験によって実現できつつある。こうした、災害時における女性たちの主体的な活動は、ミサ・プツァの活動の経験が大きく活かされている。平常時における、女性たちのつながりを形成し、活性化する仕組みが、災害時におけるレジリエンスとして大きな効力を持ったといえるだろう。

一方で、低位カーストのポデの女性たちは、震災以前から女性自助組織を結成していなかったため、災害時にも連帯して活動することができなかった。以前から女性自助組織があった場合でも、預金活動以外の活動をしたことがなかったことから、震災時や復興過程においても女性たちが何か共同して活動することはなかった。震災という危機的状況に直面した際には、今までに築いてきた絆が相互扶助の基本となるため、平常時から組織化して連帯できるようにしておくことが重要であることが明らかとなった。彼女たちは災害弱者であった。

ポデ女性たちが組織化できない理由は、筆者の聞き取り調査で明らかになった。それは、多くのカースト集団はそれぞれ集団ごとに集住するにもかかわらず、ポデの人々は、どこのツールにおいてもマイノリティグループであり、最も人口が少ないケースだと、1つのツール内部に3軒しかポデが住んでいないという状況である。そのような少ない人口のもとでは、女性自助組織を結成して他のグループと同様の活動をするのはそもそも不可能である。既存

の異カーストの女性自助組織にポデの彼女たちが加入する選択肢も考えられるが、伝統的なカースト規範の下では、カーストを越えて共に活動をするということは難しい。女性たちは組織化することで社会的役割を得ており、災害時にも活躍できるといえるが、ポデの場合に関しては組織化できないのが現状である。震災時には、社会の根底にあるカースト間の壁が表面化し、パタンでは、カーストを超える共同は難しいという問題が浮き彫りとなった。

(3) 今後の展望

上述してきたように、2015年ネパール地震から4年が経過し、復興はどのように進められているのかを調査していると、復興の主体には、ジェンダークラス格差、カースト間格差がはっきりと見受けられる。復興に主体的になれた女性たちは、既存の女性自助組織の会員たちであり、それまでの活動経験が重要であることが明らかになった。例えば、新たな観光業を中心とした復興計画が進められているPrツールと、芸能ショーやホームステイ・プロジェクト等の多角経営を計画しているNツールの多彩な創造的復興過程では、女性自助組織が構想、運営の重要な役割を担っている。女性たちが組織化していなかったり、女性自助組織が存在しても、活動のほとんどなかったりした低位カースト社会では復興過程においても女性たちが災害弱者のままであることも見えてきた。

今回は触れることができなかったが、農民カーストの復興計画にはNGOや海外ボランティア協会の支援が入っていて、農民カースト集団が社会的に台頭している。今後は、農民社会と外部団体のバックアップ体制とカースト間関係の変容についても研究をしていきたい。

参考文献

- 石井溥「ネパール村落のカースト・システム ネパール村落調査報告ー2」、『アジア・アフリカ言語文化研究』第10号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1975年、83-143頁。
- 竹内愛「ネパールにおけるネパール族女性の『新たな生き方』に関する文化人類学的研究ー女性自助組織『ミサ・プツァ』をめぐってー」、『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第8号、愛知県立大学大学院国際文化研究科、2007年、135-164頁。
- 「ネパール社会における女性自助組織とジェンダー・カースト構造の変化ー女性の潜在的な変革の力とその具現化ー」、『比較思想研究』第39号、比較思想学会、2013年、165-170頁。
- 「ネパール大地震の復興過程に現れるジェ

- ンダー—パタン（ラリトプル市）のNトールを事例として—』『Autres』第9号、多文化研究会オートル、名古屋大学、2018年、71-88頁。
- 「ネパールの旧王都パタンにおける女性自助組織経営の展開」『人類学研究所 研究論集』第6号、南山大学人類学研究所、2019年、129—150頁。
- 林勲男「災害にかかわる在来の知と文化」橋本裕之・林勲男編『災害文化の継承と創造』臨川書店、2016年、pp.14-28。
- マハラジャン、ケシャブ・ラル「カトマンズ近郊の都市フロンティア—パタン市の町形成を事例に—」『三田学会雑誌』第95巻第2号、慶応義塾大学、2002年、31(221)—49(239)頁。
- 山上亜紀「ケガレにまつわる観念とその諸相—ネパール・バフンの視点」『成蹊人文研究』第9号、成蹊大学大学院文学研究科、2001年、111—151頁。
- 「米の象徴性—ネパール・ネワール社会における浄・不浄観念を中心に—」『アジア太平洋研究』第33号、成蹊大学アジア太平洋研究センター、2008年、59—78頁。
- Gellner, David N. 1996 *Monk, Householder, and Tantric Priest: Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual*. Cambridge University Press